

# カーテンコール

2005(平成17)年4月5日鑑賞(ヘラルド試写室)

★★★★



監督・脚本=佐々部清/プロデューサー=臼井正明/原案=秋田光彦/出演=伊藤歩/藤井隆/藤村志保/鶴田真由/井上堯之/夏八木勲/奥貫薫/津田寛治/橋龍吾 (コムストック配給/2004年日本映画/111分)

## 第4章

## SHOW・HEY お得意の 社会派映画

……昭和30年代は日本映画の全盛期。昭和38年には『下町の太陽』と『いつでも夢を』が大ヒットしたが、そんな元気な昭和ニッポンの時代、下関のみなと劇場に幕間芸人と呼ばれる1人の若者がいた。しかし映画が斜陽産業になっていく中、クビを宣告された彼はその後どんな人生を……？ 昭和という時代を背景に、日本とチェジュ島（済州島）を結ぶ父親探しの旅は、何度も涙を流さずには観られない感動作。『チルソクの夏』で生まれ故郷の下関を舞台とした日韓の若者の恋をみずみずしく描き、『半落ち』で日本アカデミー賞最優秀作品賞を受賞した佐々部清監督の腕の冴えはさすが！

### この映画の舞台は？

私が親しくしている大阪市天王寺区にある大蓮寺應典院の秋田光彦住職は、幼少の頃、大阪の千日前劇場で実在の幕間芸人を目の当たりにしていたとのこと。そんな自らの体験をもとに秋田住職が原案を起こし、『半落ち』（03年）（『シネマルーム4』230頁参照）で第28回日本アカデミー賞最優秀作品賞を受賞した佐々部清監督が脚本を書きあげたのがこの映画。

その舞台となる映画館「みなと劇場」のあるまちは下関。ここは佐々部監督の生まれ故郷であり、「シンプルで心暖まるいい映画」と私が評価した、同じく佐々部監督作品である『チルソクの夏』（03年）（『シネマルーム6』63頁参照）の舞台にもなったまち。

## この映画の誕生と今後の展開は？

この映画の試写の案内を秋田住職から直接電話で受けたのが3月末。そして4月5日に開かれたヘラルド試写室での試写は第1回目のもので、秋田住職が今後この映画宣伝用の応援部隊として人選したメンバーを招待してくれたもの。佐々部監督は既に次回作『四日間の奇蹟』を2005年3月10日にクランクアップし、2005年6月からの上映が決定している。したがって『カーテンコール』は、『半落ち』に続く作品として既に完成しているものの、その公開は『四日間の奇蹟』の後になることが決定している。そのため秋田住職は、『カーテンコール』宣伝のための応援部隊を早々と結成し、こき使おう(?)という戦略をたてたわけだ。それをわかりつつ乗ってしまった私は、この映画を観て涙を流して感動してしまったため、心の底からその任務を果たそうという決意を新たにすることに……。さすが百戦錬磨の住職ともなれば、人使い戦略のたて方も上手いもの！

## 福岡へ左遷！

時代は2004（平成16）年。この映画の語り部として登場する主人公の橋本香織（伊藤歩）は出版社の見習い記者で、正社員を目指している若い女性。そんな香織が今日はスクープ写真の撮影に大成功！政治家と女優のスキャンダラスなキスシーンを見事にキャッチしたわけだ。意気揚々の香織だったが、このスキャンダル騒動発生にショックを受けた女優は突然自殺。特ダネ賞モノだった香織は一転して謹慎処分となり、今は寂しくコピーとりの仕事ばかりに。そんな香織を心配した上司は、気分転換をかねて、自分の先輩が経営している福岡のタウン誌の会社に香織を転勤させることに。福岡は、香織の故郷である下関のすぐ近く。傷心の香織は命ぜられるまま福岡へ赴いたが、さてその初仕事は……？

## 現在の看板は『あの子を探して』と『ブエノスアイレス』

2004年夏のある日、香織が初仕事の取材のため訪れたのは下関にあるみなと劇場。その看板は『あの子を探して』と『ブエノスアイレス』（この2本の作品については『シネマルーム5』188頁、234頁参照）。

香織が聞きたいことは、昭和30年代に、みなと劇場の「幕間芸人」として映画上映の合間に舞台上で登場して大人気を博していたという安川修平のこと。その動機は、タウン誌に送られてきた1枚のハガキから……。さてこのハガキは誰が書いたのか？ それもこの映画の興味の1つだよ……。

秋田住職は少年時代に大阪の千日前劇場で幕間芸人を見たことがあると言うが、高校まで愛媛県の松山市で過ごした私は、そういう人種の存在を知らない。ホンマかいな……？ 映画の合間に登場して一体何をしていたの？と私も興味津々……？

## 香織に語ってくれたのは宮部絹代

みなと劇場の2代目の支配人は、先代のオヤジがやっていた時、たしかそんな人がいたナという程度の記憶だったから、全く取材の役に立たなかった。そんな時、「安川修平さんのことならよく覚えていますよ」と言って香織に話をしてくれたのは宮部絹代（藤村志保）。先代の時代からずっと劇場の売店に立ち、みなと劇場と日本映画の昔から今日までを現場で見続けてきた女性だ。修平がみなと劇場で働き始めたのは1961（昭和36）年のこと。絹代は、若かりし頃の修平の活躍ぶりを、目を細めながら愛情をこめて淡々と香織に語り聞かせてくれた。この絹代を演ずる藤村志保も、今はこんな昔話をするおばあさん役だが、昔は高田美和らと並ぶ大映の看板女優の1人。デビューは1962年の『破戒』で、1960年代という大映の全盛時代には市川雷蔵や勝新太郎との共演作も多い。そして近時『長崎ぶらぶら節』（00年）や『啜う伊右衛門』（03年）等に出演しており脇役として貴重な存在。

## 昔の看板は『悪名』と『霧笛が俺を呼んでいる』

場面は一転し、再度みなと劇場の大写し。時代は1961（昭和36）年、修平が働き始めた頃のみなと劇場の姿だ。ここでスクリーンはカラーから突然モノトーンに。そして劇場にかかっていた看板も、『悪名』と『霧笛が俺を呼んでいる』に。これは言わずと知れた勝新太郎と小林旭の代表作。修平はいつもニコニコしながら列をなして並ぶ観客を整理、誘導したり掃除したりと、みなと劇場の雑用を器

用にこなしていた。

## 『いつでも夢を』を知っているか？

佐伯孝夫作詞・吉田正作曲、橋幸夫・吉永小百合のデュエットで1962年のレコード大賞に輝いた曲が『いつでも夢を』。今でも北新地にあるラウンジのカラオケでは、昔を懐かしむオッチャンたちがよく歌う曲。デュエット曲のベスト1は何といっても石原裕次郎・浅丘ルリ子の『銀座の恋の物語』だが、今年60歳の還暦を迎えた吉永小百合ファン＝サユリストには団塊世代のオッチャンが多い。しかし今どきの若い人たちは、さてこんな歌をちゃんと知っているのだろうか……？

私は橋幸夫、舟木一夫、西郷輝彦の御三家、野口五郎、西城秀樹、郷ひろみの新御三家、そして山口百恵、森昌子、桜田淳子の花の中三トリオはもちろん、フォークから最近のヒット曲まで何でもござれの大カラオケファン。そして、浜崎あゆみはもちろん、shela、I WiSH、BoAなどの女性シンガーのナンバーが大好きな変なオヤジ……？ だから、オッサン連中が、今どきの若い歌手の歌を頭から毛嫌いし、ボロクソに言うことには納得がいかない。そのため、いつも「それはお前の頭が古く固くなり、柔軟な吸収力がなくなっているだけだ」と反論しているが、同時に若い諸君にも、日本が元気で前向きだった昭和ニッポンの「歌謡曲」の良さもわかってもらいたいもの……。

## 修平の歌はうまいの？

若かりし頃の安川修平を演じるのは藤井隆。ちょっとなよなよした雰囲気(?)で私はあまり好きなタイプではないが、この映画では、いつもニコニコしながら一生懸命働いている役柄にピッタリ。こんな雑用係の修平が幕間芸人となったのは、あの当時よく起こった(?)ある出来事(事件)から……。それは、今どきはありえないだろうが、途中でフィルムが切れること。せつかくいい場面なのに、突然スクリーン上の画面が乱れ、音がおかしくなったと思うと、その後すぐに画面が真っ暗に……。こりゃ観客は怒るに決まっている……。みなと劇場の観客席はいっぱい立ち見もある中、座頭市＝勝新登場、といういいところで

突然フィルムが切れたのだから、観客は当然ブーイング。「しばらくお待ちください」とお詫びしたものの、修理にはちょっと手間どりそう。こりゃヤバイ……。

そこで、修理時間をかせぐべく突如舞台上上がったのが修平。修平は目を剥き、マイクで「シュシュ」と風を切る音を演出しながら、手に持ったホウキでバツバツと太刀回り。変な座頭市(?)の突然の登場に観客はあっけにとられ、固唾を呑んでこれを見守っているうち、「それでは再度ホンモノの座頭市をどうぞ」と切りかわったため、拍手喝采。何とも器用な修平の演出だ。その修平は以降、映画上映の合い間に舞台上上がって、小さなギターでコードだけ弾きながら人気曲を披露。ホンモノの歌手ほどではないが、これがホドホドに上手で味があったから客にはバカ受け。以降修平は幕間芸人の大スター(?)に……?

## 君は「斜陽産業」という言葉を知っているか?

1950年代の戦後復興を終えて、高度経済成長政策に走り始めた1960年代初頭のニッポンの娯楽の王様は何といっても映画。だが1960年代の日本経済の成長はさまざま……。そして1964年の東京オリンピックを経て1970年の大阪万博が最高潮……。しかしテレビの普及につれて1960年代後半以降次第に映画人気はかげりを見せ始め、観客数は減少の一途に。その当時の日本映画を象徴する言葉が「斜陽産業」。もちろん「斜陽」とは太宰治の小説『斜陽』からとったものだが、まさにピッタリの形容詞。第2みなと劇場まで出していた初代オーナーも、まず第2劇場を撤退させ、経費節減に励みながら、何とかみなと劇場を維持していたが、修平の幕間芸人の人気も凋落している今、遂にクビの宣告が……。この当時はまだ平成時代の「失われた10年」のはやり言葉(?)であるという「リストラ」という言葉はなく、クビの宣告もあっけないもの。そんな状況の中、修平は……?

## 修平を支えた恋女房

修平が幕間芸人として舞台上で歌っている姿をいつも見ている女性がいた。それが平川良江(奥貫薫)。彼女は幕間に舞台にあがる修平を見て楽しみ、映画上映中はロビー(廊下)のソファで休憩しているという変わった女性。したがって、もう1つある隣のソファでひと休みしている修平と2人が並ぶことになり、い

つしか声をかけ合うことに。そして当然のように2人の間には愛が芽生え、1965（昭和40）年には周りのみんなから祝福されて結婚。幕間芸人を務めている修平が休憩中にソファで食べるのは、いつも良江が作る愛妻弁当となった。そして同じ年に一人娘美里も生まれて、幸せな毎日を過ごしていたが……。

修平には幕間芸人しかできないし、その仕事が最も修平に似合っていると確信している良江は、クビ切り宣告に対して「何とかそれだけはやめてほしい」と頼み込み、オーナーの説得に成功。これを売店係の絹代らが応援したのはもちろんのこと……。やはり阪田三吉にしろ桂春団治にしろ恋女房の力はすごい……。しかし、みなと劇場のお客はその後減る一方。こうなりゃ修平の仕事がなくなることもはややむをえない。ついに修平がみなと劇場から離れることになったのは大阪万博が開催された1970（昭和45）年。まさに昭和ニッポンそして斜陽産業の代表であった映画の憐れな末路としかいいようがない。しかしひょっとすると今は、平成ニッポンの末路かも……？

## 『チルソクの夏』 下関—プサン

佐々部監督の『チルソクの夏』（03年）はホントに心暖まるいい映画だったが、そのキーワードは下関と韓国のプサン。そして『カーテンコール』の1つのキーワードは同じ下関。これは、佐々部監督の生まれ故郷が下関だから、いわば当然のこと。しかし、『カーテンコール』のもう1つのキーワードは、プサンではなくチェジュ濟州島。

皆さんはお気づきでしょうか？ この映画の一方の主人公である舞台芸人は、名は修平だが、姓は安川。『チルソクの夏』のもう1人の主人公が安くんこと安大豪だったことを思い出せばすぐにピンとくるように、安川という姓は韓国人に多いもの。そう、いつもニコニコしている働き者の安川修平は在日韓国人2世だったのだ。するとその娘の美里は……。そして、映画産業の斜陽化によって職を失った修平はその後どのように生きたのだろうか……？

## 香織の実家も下関

福岡のタウン誌の会社に左遷（？）された香織が、近々閉鎖されるみなと劇場

に昔働いていた幕間芸人の取材のために下関を訪れたのは平成16年の夏。ここ下関は香織の生まれ故郷で、父親の橋本達也（夏八木勲）が今は1人で住んでいる。昼間に絹代からの取材を終えた香織は、久しぶりに実家に戻り、父親と2人でゆっくりと過ごす時間をとることができた。そんな中、香織は幕間芸人の取材のために下関に来ていることを説明し、父親にもみなど劇場と幕間芸人のことを質問。父親はみなど劇場を覚えていた。しかしそこに幕間芸人がいたことについてはかすかに覚えていたものの、よくわからない。そこで、明日同僚に聞いてみてやると香織に約束した。

## 私の大好きな鶴田真由の役柄は

後半になって、突如登場してくるのが、成長した美里を演じる鶴田真由。『梟の城』（99年）、『半落ち』（03年）に出演している知的な雰囲気を持った美人で、私の大好きな女優だ。

修平の恋女房良江は、度重なる無理がたたったのか1970（昭和45）年には一人娘の美里を残して死亡してしまった。そんな中、修平はそれしかできない幕間芸人の芸をキャバレーなどで生かそうと頑張っていたが所詮は素人芸だったようで、ギターのコードだけを弾いて歌う歌や、幕間にやっていたから受けていただけ（？）のちょっとした「ダジャレ芸」も、華やかさと派手な演出を売りものにするキャバレーでの芸としては全然ダメ。

次々と職場を変えたものの、次第に職場を失っていった修平が昭和52年に決断したのはチェジュ島（済州島）への帰国。そう決心した修平は美里に対して「仕送りは毎月必ずするから」「必ず迎えにくるから」と約束したが……。修平の言葉信じて12歳の美里は1人頑張っていたが、結局は父親から裏切られ保護施設に入れられることに……。

こんな風に苦労を重ねてきた美里だったが、今は結婚して夫の宋義徳（津田寛治）と2人で焼肉屋を経営し男の子にも恵まれ幸せそうな生活を送っていた。取材を重ね、調査に調査を重ねる中、やっとこの焼肉店にたどり着いた香織は、今は成長した修平の娘美里から、その後の詳しい話を聞くことができたが……。



## 香織が金田君と別れたのは？

青春時代を下関で過ごした香織には、カッコいい同級生のボーイフレンドがいた。彼の名は金田信哲（橋龍吾）。カッコがよくて頭もよく、理想的な男性だったが、残念ながら（？）彼の国籍は韓国。人種差別色の濃い下関（？）で、韓国人との恋がタブーとされていたことは、『チルソクの夏』を見てもよくわかるというもの。『カーテンコール』では、香織の父親の達也は『チルソクの夏』における主人公郁子の父親ほど強い偏見はないものの、娘の香織が金田君と結婚することにはやはり一定の躊躇が……。そのうえ当の本人の香織もイザとなると金田君が韓国人であることにこだわり、恋や結婚にふみ切れなかったよう。そんな昔の思い出をひきずりながら、香織は今また下関で金田君と再会することに……。

## さまざまに結ぶ運命の糸

修平の娘美里が宋義徳と結婚して今は焼肉店をやっていることを香織が知ったのは、民団の事務所から。そして同時に知ったのが、あの初恋の男性である金田君も今は結婚して子供もいるということ。宋義徳と金田は友達だ。夫の宋義徳は、父親に捨てられたという強い被害者意識を持っている妻美里の気持を理解しつつ、「でもきっと心の中では父親に会いたいはずだ」と確信を持っていた。そしてここまで取材を重ねてきた香織もその思いは同じ。そんな香織や宋義徳を強力に手助けしたのが金田。強力な組織力を持つ民団の力によって、ついに金田は、安川修平が今も生きてチェジュ島に住んでいることを調べあげ、これを香織に報告した。

## 今日はみなと劇場の閉館の日

昭和ニッポンの映画全盛期を過ごしてきたみなと劇場も遂に平成16年の今日閉鎖することに。そんな記念の日にチェジュ島から呼ばれたのが、1960年代前半の若かりし頃、このみなと劇場の幕間芸人として一世を風靡していた安川修平。今は74歳となった修平（井上堯之）が、今なおギターを片手に歌う代表曲は『いつでも夢を』。そして高倉健さんの『網走番外地』。こんなみなと劇場を久しぶりに



いっぱいにしたのは、元気だった昭和時代のニッポン、映画館がいっぱいになっていた時代の映画を懐かしんで集まった昔の観客たちだ。こんな観客たちに修平を紹介するのは、もちろん最後までこのみなと劇場で働いていた絹代。そして、ここを逃せば涙の「父娘ご対面」ができなくなるとやっきになって美里を説得したのは、美里の夫の宋義徳であり、金田と香織。金田の説得に応じて、みなと劇場のロビーにあるソファーまでは来たものの、美里はやはりかたくなに劇場の中に入ろうとはしなかった。

一足先に劇場の中に入り、今も変わらぬ修平の幕間芸人としての芸を見ていたのは美里の子供すなわち修平の孫と彼を連れた宋義徳。そして香織と昔を懐かしむ香織の父親の達也たち。香織のすすめによって舞台上に上がった宋義徳と修平の孫。その紹介をするのは香織だ。父と孫のこのご対面のシーンを見れば、きっとあなたも涙が流れてくるはず……。予想できる設定とはいいながら、やはり感動的なシーンでは涙を流すのが自然な反応。そしてそうだからこそ映画はいい……。

### さらなる感動シーンが……

映画はここで終わってもそれなりの感動作。しかし秋田住職が原案をおこし佐々部監督が脚本を書いたこの『カーテンコール』はさらにしつこい(?)ものだった。映画はさらに続いていく。ここからの舞台はチェジュ島が中心。私も1996年6月にはプサンに、1997年10月にはチェジュ島に旅行したことがあるが、チェジュ島はそりゃすばらしい島であり、観光地。この映画では、美里を乗せたタクシーの運転手の語りの中でごく一部チェジュ島の姿を見せてくれるが、それはあくまでもサブのもの。メインの舞台は70歳を超えた修平が住む小さな家だ。香織は先にここを訪れて修平と面会していたが、やはり美里もここを訪れることに……。しかし残念ながら美里が訪れた今、修平は既にそこにいなかった。果たして修平が行ったところは……。そして、修平の後を追う美里は修平と対面することができるのだろうか……。感動シーンの中、あなたの顔が涙でクシャクシャになること確実なシーンが待っているよ……。

2005(平成17)年4月11日記